

平成 28 年 6 月 28 日現在

機関番号：32630

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24520263

研究課題名(和文) 18世紀イギリスにおける公共圏文化の多層性に関する歴史的研究

研究課題名(英文) A Historical Study of Complex Structure in the Eighteenth-Century English Public Sphere

研究代表者

吉田 直希 (YOSHIDA, Naoki)

成城大学・文芸学部・教授

研究者番号：90261396

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：18世紀のイギリスは「最も上品な時代」であると同時に「最も悪徳に満ちた時代」である(『スペクテイター』第6号)と考えられてきた。シャフツベリーが理想とした公衆、すなわち合理性と礼節を重んじ、審美的感性を有するブルジョワ知識人たちが作り出した公共圏は、マンデヴィル流の性的情念と金銭欲に支配された欲望の世界との緊張関係の下に誕生したわけだ。本研究は、逆説的でもあり両義的でもある18世紀の公共圏文化を研究対象とし、その形成の歴史を描き出した。その際、同時代の経済・科学・ジェンダーといった新たなシステム構築との関係性を検証し、近代的主体の複雑性に歴史的意味を見出した。

研究成果の概要(英文)：The eighteenth century in England is generally thought to be both "the most polite" and "the most vicious" age. Anthony Ashley Cooper, 4th Earl of Shaftesbury idealized the contemporary bourgeois public world by giving it a possibility of attaining aesthetic sensibility as well as rationality and morality. This ideal sphere cannot be separated from that of evil and desire governed by self-interest in Mandeville's sense. This study explored the history of the paradoxical and ambivalent nature of public sphere from the viewpoint of the construction of new system regarding economics, science, and gender. The modern subject formation has been explicated in the complex history of public sphere of the eighteenth century.

研究分野：人文学

キーワード：18世紀 イギリス 公共圏 歴史 ジェンダー

1. 研究開始当初の背景

18世紀啓蒙主義は古くて新しい研究テーマである。カントの「啓蒙とは何か」という問いかけに対する最新の解答が、*This is Enlightenment* (2010) に収められているが、この思想の現代的意義を経済/文学/科学の相互関係の観点から論じたものは皆無であった。1680年代のコーヒーハウス文化からフランス革命後の国民意識の高揚までを視野に入れて、イングランド公共圏文化を多層的に捉え直すことに本研究の最大の特徴があると考え研究を開始した。とくに本研究では、経済学と近代科学という同時代の新たな知のシステムと文学との共存・分離関係に焦点を当てて研究を進めるため、多様な起源を有する公共圏文化の歴史的層性を明らかにすることを目指した。

平成17-19年度の研究課題「18世紀イギリスにおけるポルノグラフィの誕生 ジェンダー/セクシュアリティの表象に関する歴史的研究」と21-23年度の課題「18世紀イギリスにおける『乞食オペラ』プロジェクトの歴史的意義」をさらに発展させ、より大きな視点から18世紀公共圏文化の歴史を精査する必要があると考えるに至った。また、平成18-20年、22年にアメリカ18世紀学会で行った研究発表と質疑応答を通して、歴史の原動力としての公共圏文化の重要性を再認識し、そこで得られた学際的交流と情報交換をもとに、本研究を始めることとした。23年にはニューヨーク大学にて、クリフォード・シスキン教授、メアリー・プーヴィー教授と二回にわたり研究打ち合わせを行い、本研究の基本的枠組みに重要な示唆を与えてもらった。

研究代表者はこれまで、18世紀エロティカに焦点を当て、セックスのみに限定されないジェンダー/セクシュアリティの多面性を明らかにすることを目的として研究を続けてきた。(1)ポスト・コロニアル批評の視点に立って、ジョンソンの英語辞典を検討し、グローバル/ローカルの対立に性の表象を読み込む可能性を提示した(平成18年のアメリカ18世紀学会での発表) (2)ホガースの版画作品を出発点としてエロティック・アートの果たした文化的役割を考察した(絵画『乞食オペラ』のジェンダー表象を論じた平成19年の研究論文) (3)ポスト・ジェンダー/セクシュアリティ論のための理論的枠組みを提示した(グローバルな文化研究の行方について議論した平成19年のアメリカ18世紀学会での発表と『英語青年』での論考) (4)ジャンル論からシステム論への移行を目指す文学研究について検討した(平成21年の東北英文学会シンポジウムでの司会発表) (5)初期近代イギリス文学とエロスに関する通時的考察を行った(平成22年の日本英文学会シンポジウムでの司会・講師発表)。本研究ではこれらの成果を踏まえ、18世紀啓蒙主義

の多層性を解明することを目指した。

2. 研究の目的

本研究は、ハーバーマスの公共性概念とアンダーソンの共同体幻想論を批判的に継承しつつ、グローバルな視点からイギリス公共圏の歴史を考察することを目的とした。

18世紀初頭のイギリスでは、宮廷や教会の権威が比較的弱く、公平無私な「公衆」が次第に文化形成の中心的役割を担うようになった(ハーバーマス)と考えられている。もちろん、この合理的な公衆は悪徳に満ちた「私」と表裏一体であり、公私の緊張関係に焦点を当ててみるならば、上品なブルジョワ知識人がこの時代の文化的空洞を埋め合わせるべく俄に登場し、近代イギリス公共圏が誕生したと単純に考えることはできない。本研究では、クリフォード・シスキンらによる18世紀啓蒙主義に関する最近の代表的研究(*This is Enlightenment*, 2010)を批判的に検討することにより、公共圏誕生の複雑な歴史性を解明し、同時にその担い手である近代的主体の特性を文学研究の視点から解明することを目指した。公共圏文化の歴史を経済・科学・ジェンダーの観点から検証するために、以下の4点を分析テーマとして取り上げた。

- (1)文化の商品化と公衆の誕生(キーワード: コーヒーハウス、仮面舞踏会、ヴォクソール歓楽園、ホガース、量販古本業)
- (2)経済学と文学の専門化(イングランド銀行、信用経済、紙幣と価値の表象、デフォーとアダム・スミス)
- (3)文学における快樂と近代科学における自然理解(シャフツベリー、近代科学と自然哲学、ニュートン、精神、理論的抽象化)
- (4)文化とジェンダー(女性消費者、美德、娼婦、ハナ・モア、道徳教育、感受性文学、『都市と田園』)

3. 研究の方法

全体としての研究方法は、公共圏文化の歴史を経済・科学・ジェンダーの観点から実証的に検証するために、一次資料の収集・整理・読解、二次資料を用いた理論の再検討を有機的に統合した。

具体的には、上記の4つの項目を以下の三段階に分けて検討し、最終年度に総括を行った。

第一段階

(1)と(4)について:文化の商品化が「公衆」の誕生に果たした役割を明らかにするため、コーヒーハウスと定期刊行物、ヘイマーケット、ラニラでの仮面舞踏会、ヴォクソール歓楽園とヘンデル、トマス・アーン、ホガースの演目、ジェイムズ・ラッキントンによる量

販古本業と女性読者について検証した。

(2)について：経済学と文学の一体化を特徴とするデフォーの初期の作品群を取り上げ、イギリスでの信用経済を推進した「小説」の役割について考察した。

第二段階

(2)について：経済学と文学が分離へと向かう歴史的過程をアダム・スミスの道徳感情論を中心に検討を行った。

(3)と(4)について：文学における快樂の表象が近代科学の抽象的理論化とどのような関係にあるのかを明らかにした。特に、精神の物質性に関する議論がなぜ同時代の「悪徳」に結びつけられていたのかを考察し、女性のセンチメンタリズムと道徳の関係性に関する新たな問題提起を行った。

第三段階

(4)について：公共圏における女性の二面性（消費者／商品）について検討した。文化の創造者としての理想的女性像がいかにして作られ、また同時に女性化する文化に対する痛烈な批判が公共圏内でどのように議論されてきたのかを検証し、ハーバーマス流のホモソーシャルな公共性概念を柔軟に切り開くことを目指した。

4. 研究成果

本研究により、ハーバーマスの公共性概念とアンダーソンの共同体幻想論を批判的に継承しつつ、グローバルな視点からイギリス公共圏の歴史を捉え直すことが可能となったと考えている。国内外での段階的に関連するプロジェクトを積み上げ、有機的に総合することにより、成果は、大きく以下の4点にまとめることができる。

(1) 18世紀になってはじめて、文化は商品としての価値を持つようになったが、商業化した文化がハーバーマス流の理想的ブルジョワ公共圏にどのような影響を与えてきたかが明らかになった。まず、娯楽、余興として受け入れられてきた、いわゆる「低級な」文化が、当時の舞台、雑誌、文学、絵画、演劇において、どのように販売されてきたのか、またこの種の商業文化に「公衆」がいかに接していったのかを以下の7点を中心に分析し、文芸共和国の拡大とその内部における階級意識の顕在化を明確にした。

1. Ned Ward, *The London Spy*, Part X (1703)
2. *Bartholomew Fair: An Heroi-Comical Poem* (1717)
3. *Wat Tyler and Jack Straw; Or, The Mob Reformers* (1730)

4. *Order of the Court of the Common Council* (1700)

5. *The Pigs Petition against Bartholomew-Fair* (1712)

6. James Lackington, *Memoirs written by himself* (1790)

7. William Hone, *The Every-Day Book* (1826-7)

(2) 文化の商品化は、イングランドにおける信用経済をめぐる新しいジャンル、すなわち経済学の誕生と密接に関係していることがわかった。デフォーの初期の作品に顕著に見られるように、18世紀前半においては、経済／文学は未分化の状態にあった（ブーヴィー）。デフォーに関しては次の5点を中心に検討し、経済学史関連資料をEighteenth Century Collections Onlineから補充した。

1. *The Complete English Tradesman* (1726)

2. *Essay on Public Credit* (1710)

3. *Essays upon Several Projects; or, Effectual Ways for Advancing the Interests of the Nation* (1702)

4. “A True Relation of the Apparition of One Mrs. Veal . . . to One Mrs. Bargrave.” (1706)

5. “The Villainy of Stock-Jobbers Detected and the Causes of the Late Run upon the Bank and Bankers Discovered and Considered.” (1701)

(3) 18世紀後半には、信用経済を推進する市場拡大の流れの中で、経済／文学は徐々に互いに他を差別化するようになっていった。文学と経済が決定的に袂を分かつのは、ワーズワース、コールリッジらによるロマン主義以降であるが、18世紀を通して、小説という新しいジャンルが独自の「文学」的価値観を作り上げていったのはなぜか。この問題を解明するために、経済と文学の共存関係から分離独立へと向かう歴史的推移を検討した。その結果、文化の商品化が公共圏に与えた社会的影響について理論的考察の必要性が浮き彫りになり、考察の対象とした。また、「想像の快樂」を主張するアディソン、シャフツベリー、さらにはアレクサンダ・ジェラルドやパークに共通する中立的、抽象的な快樂一般を追求する美学に関する文学的言説を対象とし、商品化された文化とは異なる種類の、いわゆる「上品な」文化の創造について考察した。その際、ボイルやニュートンが主張する「自然の法則」を分析し、18世紀の科学／文学が「精神」という目に見えない存在をどのように考察するに至ったのかを歴史的に検討した。18世紀啓蒙主義を理解する上で最も重要なのは、「意識を物質的に説明しようと試みた」先駆的科学者の思想であることがわかった。

(4) ハーバーマスの公共圏概念では、女性がこの文化圏にどのように参加してきたのかが明確になっていなかった。文化の商品化について考える際にも、消費者としての女性の役割、そして消費の対象としての女性の役割を見逃すことはできないだろう。そこで、女性の欲望、想像力、快楽、美德をめぐる様々な言説を対象に、公共圏における近代的主体の歴史性について、ジェンダーの観点から検討した。「展示され、消費されることを欲望する女性」を作り出す、と同時に制御することを目指す 18 世紀公共圏文化の複雑な力関係が確認できた。

以上の研究により、「最も上品な時代」であると同時に「最も悪徳に満ちた時代」に誕生したイギリス公共圏文化の歴史を詳細に辿り直すことが可能となり、現在その包括的な成果をとりまとめている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 1 件)

吉田直希 『『乞食オペラ』における諷刺の階級 / ジェンダー的主体の捻れ』 Seijo English Monographs, No.44 成城大学大学院文学研究科 pp.141-167.2015.

〔学会発表〕(計 3 件)

吉田直希 「A Sentimental Journey における Methodism 的主体 - 熱狂的感受性の表象」 『感受性の <不> 道徳性と教育 - イギリス近代文学におけるジェンダー編成の諸相』 2015 年 9 月 26 日 上智大学四谷キャンパス

Naoki Yoshida "Representations of Asia in the Long Eighteenth Century" The American Society for Eighteenth-Century Studies 2014.3.22 Williamsburg Lodge, U.S.A.

吉田直希 「18 世紀エロティカと快楽の感受性」 日本ジョンソン協会第 45 回大会シンポジウム 『愛と(不)道徳の感受性』 2012 年 5 月 28 日 アルカディア市ヶ谷

6. 研究組織

(1) 研究代表者

吉田 直希 (YOSHIDA, Naoki)
成城大学・文芸学部・教授
研究者番号：90261396